

詠む広場

毎日歌壇

米川千嘉子 選

よい煙だけでいいのにバーベキュー焚き火あ
なたの線香花火 名古屋市 外山 雪

△評「よい煙」という捉え方が面白く、
それぞれの煙の場面には楽しさや情緒があ
る。よくない煙は山火事などが。

朝目覚め夢の登場人物に「フラー」と叫ぶ
一人居の婆 坂戸市 納谷香代子

△評「フラー」と叫んだのは作者。自
分の心に不思議な人が住んでいる。

百六十センチない弟のタックルを褒めくれし
山口良治氏逝く 京都市 寺西 和史

絶望をひたすら描いた日の暮れのつげ義春の
立石歩く 東京 池崎富実夫

山荷葉真白き花は雨に濡れガラス細工のごと
く透けゆく 鶴岡市 大沼 葉子

声という汝が肉体の奏でたる音色をたどり心
をみつむ 春日部市 富代 康志

全力で乳吸うみどり児濡れたよなつむじま
つと美しく渦巻く 村上市 杉江 正子

五年前子から届きしカーネーション今朝のつ
ぼみに六月の風 仙台市 石川 初子

母の味受け継ぎし姉は病得つ家伝の味にわれ
は挑まん 秦野市 森田 博信

風薫りドラゴンボートの太鼓鳴る酷暑の夏の
扉が開く 堺市 平山 詩乃

加藤 治郎 選

介護用ベッド2台が未使用とメルカリにあり
落札者なく 東京 松 あき子

△評「未使用の理由を想像する。購入した
が施設に入所することになったのか。生活
の事情があるのだ。結句がさびしい。

パーソナルスペース柔く目を瞑る翼をたたむ
大きななか 平塚市 芝澤 樹

△評「周囲からは見えない空間で安らぐの
だ。自分に翼があると感じている。

毎日の暮らしの底に空豆のやさしいみどりを
灯しています 津市 川原田明子

早朝の線路にかがむ作業員耳近づけて海の音
聴く 久留米市 春日 登

汗ばんだ思考で夜明け目が覚めてもう、もが
れるわフルツトマト 鳥取市 中島 潤

ヤクルトがくびれを失う世界では殖えつづけ
てるUUUU 神戸市 浅田 拓史

寝ぼけてる君は静かに泣いていて夢の言語で
誰かを呼んだ 大津市 世田 夏雪

明け方にサイレンの音が遠ざかるみんな助か
ったいいのにな 名古屋 森本 有

この雨は淡水ですか？少しずつ私を水底にし
ずめてく フランス 小仲 翠太

ぎんいろのボール空から降ってきて分かれて
消えたうあうああん 京都市 土 玉

水原 紫苑 選

窓のない、けれど宇宙を往く船のような詩集
に百合の詩ひとつ 横浜市 街川 二級

△評「百合の詩は宇宙の言葉だろうか。窓
がないのでその香りは船の中に漂うばか
り、清らかでおそろしい。

あと何度扉を開けて出ようだろう 鳥や鳥め
く光の死期に 加古川市 石村 まい

△評「鳥になろうとして死ぬ光よ。鳥はそ
んなふうには死なないのに。

人に育てられしも忘れ胡蝶蘭は人が近づく
や警戒す 甲府市 村田 一広

暗闇に光る獣の眼光が森の一等星となる夜
川崎市 二宮 珊瑚

はからずも海に流れた笹舟を静かにすくう大
きな手よ 水戸市 水 鳥

劇薬のようなさみしさ群衆をはなれてうすい
紫陽花へ寄る 大阪 中村 杏

名前から一文字消せば鳥になる あなたの空
は青色ですか 安城市 唐澤 うに

象つかい亡き戦象の通走をあざ笑うこと赤き
太陽 静岡市 川上うてな

蝙蝠は鋼のほひひととせを十二の月はお
のづから燃え 東京 吉岡 耕大

耳澄ます夕べに辛子の種ひとつの言葉のご
とくありたり 加古川市 畑 啓之

伊藤 一彦 選

宝くじ売り場に並ぶ大人らの横すり抜ける塾
へ行く子は 金沢市 竹内 一二

△評「大人はすり抜けてゆく子供に無関心
だったろうが、子供の方は売り場の行列を
見てどう思ったか。作者の関心はそこだ。

じんわりと恋がはじまるような気がブルーア
ワーに騙されてゆく 京都市 小林 香織

△評「日没後の青空だろうか。期待と不安の
交じった気持ちを巧みに表現している。

カクテルを傾けるたび揺れているチェリーみ
たいな君の生き方 三条市 甘 辛

甥連れてお子様ランチを食べながら日の丸の
旗慎重に抜く 岡山市 佐藤紘太郎

幾つものAI相手に問うてみておのの異なる
個性に答ふ 東京 斑山 羊

朝が来て昨日と違うはずなのに朝の空気が昨
日のおくり 水戸市 井田 里紗

103のルールがあるとうへ青切符こんな
に違反していたなんて 甲府市 高瀬 孝人

死に変わり生まれ変わって十数年出窓のメダ
カ淡々と夏 仙台市 古谷 隆男

剃髪若き尼僧の片耳にすくいの如きピアス
がゆれる 奈良市 森本寿美子

公園の噴水前で対峙する明日赴任地へ向かう
自分と 横浜市 斎藤 博道

アプリで
歌短し推し

の声。それも音楽ではなく雨の音です。
遠くの雷の光と音がずれているように
滴から独立して、雨音だけがラジオか
届いたような不思議な感覚になります。
傘持たず出かける朝はきみを信じて
た傷つきの似ている 三笠山出
・雨音に四方八方ふさがれてひとりな
だと気づく日がある 大森朋
・波つたあなただの文字も滲んだノート
の日の雨をばくは持つてる ペリドッ
〓次回のお題「文」(7月27日掲載)



こちらから
投稿できます

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)宛に送付してください。

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベースに掲載されます。